
酔神仙

虹乃 咲

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

酔神仙

【Nコード】

N1645T

【作者名】

虹乃 咲

【あらすじ】

酔仙というお酒から思いついたものです。なんか意味深で終わってますが、すいません。

(前書き)

酔仙というお酒から思いついたものです

・・・ここは、どこなのだろう。私はどこにいるのだ。

広がるのは一面の濃霧、視界が白い靄で覆われているため周りを確かめることはできない。

い。

ふらふらと男は、まるで彷徨うように行く当てもなく歩き続ける。どうして自分はここ

にいるのか、どうして歩き続けているのか男には分からない。ただ歩き続けるしかないと

分かっているだけなのだ。

どれくらい歩いただろう。

不意に視界が開けた。

「ここは・・・」

まるでどこか田舎の、そう昔の中国のような家だ。だが家というより東屋と言った方が

この古びた家には似合いそうだ。屋根からは草が飛び出し、土壁は

崩れている。

こんなところに人が住んでいるのだろうか。

男はぼうつとした表情で、その家を見る。

「あら、どちら様？」

その声に振り向くと息が止まった。

その声の主は女だった。しかも男が今まで見たことも無かったように美しい女だ。まる

で絹糸のように艶がある女の黒髪は頭の上で一つに縛られており、透け通るような白

い肌は真珠のように輝き、その唇は熟した石榴を潰したように赤い。

だがその姿に合わない質素な服装だ。何日も着ているのか、女が着ている着物はあちこ

ちに穴が開いており、それに汚い布が宛がわれている。

放心している男に女が近づく。

女からは今まで嗅いだことのない芳しい香りがした。

これは酒だ。しかも熟成された香りだ。

「ああ、私、杜氏なの」

「杜氏？」

聞きなれない言葉に男は首を傾げる。

「そうね、今で言うとお酒を造る職人って言ってたわね」

「あなたは酒を造っているのですか」

「ええ、『すいしんせん酔神仙』って名前のお酒よ。聞いたことがあるかしら」

その名前に首を振る。

自分は無類の酒好きだが、そんな名前の酒は初めて聞いた。

「自分で言うのもなんだけど、神も仙人も酔わせる程のお酒なんて随分豪語していたわよ

ね」

女は肩を竦めると、まるで今そのことに気付いたように男に話しかける。

「そう言えば、どうしてあなたはここに？」

「・・・自分でも分からないんだ。なぜ私はここに？ここはどこなんだ？」

「え？じゃあ、あの方達が連れてきた訳では無かったの？では早く帰った方がいいわ、早

くしないとあなたも捕らわれてしまつわよ」

男は女の言っていることが理解できないように眉を顰める。

「捕らわれる？」

「ええ、さあ早くお帰りなさいな」

「だが、帰り方が分からないのだ」

まるで困ったように答える男を見て、女も困ったような表情をする。

「どうしましょう」

「困っているのかい」

いきなり聞こえた第三者の声に二人ははっとして振り向く。

すると二人が振り向くのを待っていたように家の影から音も立てずに一人の美丈夫が出

てきた。艶やかな切れ長の瞳が男の姿を射抜く。

それだけで男は立っていられなくなった。頭は何も考えることができないほど霞がかか

り、だが心は夢心地な気分の中にある。

着ている服は漢服であり、随分と上品な色をしている。ふわりとした髪は風など吹いて

いないのにまるで意志を持っているかのように揺れている。

「困っているんだろう、その男」

「は、あ」

偉そうな態度で言う男には尊大な態度が良く似合っていた。

「×××様、この方は困ってなどおりませんわ。直ぐにお帰りになります」

そうでしょうと、女が言うので、訳が分からないながらもその迫力に押されながら頷い

た。

「ここに君の酒がある。そして我は今日は何も持っていない。ならばその代わりにこの男

を届けてあげよう。君は優しいからな。その見知らぬ男を放っておけないのだろう」

女は黙ってその男を見つめる。

「私は嘘をつかない。君が一番知っているだろう」

まるで揶揄するような言い方に女は初めて怒りを露わにした。

なるほど、美人が怒ると怖いというのが本当のようだ。口元は笑っているのに目元が笑

っていない。

「では、×××様は貯蔵庫にあるお酒でも摘まんでいてくださいな。私はこちらの方とまだお話

がございますの」

「ああ、では一刻程で迎えに来よう」

そう言つと美丈夫は手をひらひらさせて家の影に消えた。

「あの人は？」

「×××様です」

女が名前を言うにも、その名前は頭の中に入って来なかった。

「あなたに聞きたいことがあるのですけれど」

まだ質問したさそうな男の声を遮って女は言う。

「なんでしょう?。」

「・・・今の將軍様のお名前は?。」

「將軍?。」

「ええ、まだ徳川様の代でございましょうか」

男は開いた口が塞がらなかった。

將軍なんて言葉はこの時代に聞いたことなど無い。いや、男が学生だった時に勉強した

きりだ。

女が冗談を言っているのだろうと思ったが切羽詰まったような女の表情から真面目だと

分かる。しかし何と言ったらいいのか男には分からない。

「まさか、もう・・・」

女は口を押さえて両手で自分の腕を抱く。

そのまま崩れ落ちそうな女を支えて、男は家の縁側へと女を連れ

て行き、自分も隣へと

腰をかける。

「今は平成です。徳川の時代は当の昔に終わっています」

「やはり・・・なんてこと」

そこでやっと大粒の涙が女の瞳から零れ落ち、女は悲壮な顔をする。

そんな女の表情を見ることに耐えることができずに女の背中をさする。

女は少し安心したように顔を和ませたがやはり暗い表情のままだ。そして何かを決意し

たように胸元にかけていた物を取り出して男の手に握らせる。

「これを駿河、ああ今は違うのでしょうか。分かりませんがこれを駿河の地へ届けて下さ

いませんか」

「駿河、というと静岡かな」

「静岡ですか？私には分かりません」

男がそれを受けとると親指ほどの桃色の貝殻だ。そこに穴が開けてあって紐が通してあ

る。

「これは？」

「私の思い出です。どうか、私が生まれ育った故郷に置いてきて下さい」

「構いませんが、あなたが行かなくていいのですか？」

「私は行くことができません」

行かない、ではなく行けない、ということはあの美丈夫に捕らわれているのだろうか。

確かに消える時に男を一瞥した目は冷ややかだった。

「行けない、とは？」

「私はここから抜け出せないのです。何度も試しましたが結局この家に戻ってきてしまう」

のです」

女は話の途中で泣きそうになりながら自分の身の上を語った。

女の家は代々続く酒造りの一家だった。その酒の名前は『酔神仙』、神も仙人も酔わす

ことができる酒だとして巷で有名な酒屋だった。

女も女性の身でありながら酒を造り、女が造る酒は魂がこもっていて天にも昇る気持ち

になれると噂が広まった。確かに女は酒を造ることに魂と愛情を注いで人生をかけてい

た。

そのため、女は自分の右に出る者はいないと思っていた。

ある雨の日の夜、女が酒蔵に籠もって温度を調整していると一人の童子がふらりと入っ

てきた。その童子の身なりは良く、良いところの坊っちゃんだと女は思った。そして何故

このような場所にいるのだろうと思って声をかけた。

「どうしたの、何でここにいるの？」

「・・・良い香りがする」

童子は女の側に寄り、女の着物に染み付いた酒の香りをゆったりと吸う。

「酒の香りが好きなの？」

「今まで嗅いだことの無い香りに惹かれて、つい立ち寄ってしまった」

「嬉しい言葉だね。じゃあ、飲んでみる？」

「ああ」

今にして思えば、童子にしては偉そうな態度と思ったが童子の純粹な褒め言葉につい

妖しいなど思いもしなかったのだ。

「なかなかの味だ」

「ありがとう」

やはり褒められるというのは嬉しいものだ。女は破顔して笑うと童子は目を見張り、

頷く。

「ふむ、お前、我のものにならんか」

「はい？」

「我はお前の酒が気に入った。お前を側におけば毎日この酒が飲めるのだろっ」

「あらあら、そうね。けれど、私にはこの家があるわ。残念だけど私は嫁がないといけ

ないの。だから私はもう直ぐ酒造りをやめてしまわなければならな
いわ」

女に生まれたからには嫁ぐのが役目だ。それを悔やんだことなど
ないが、自分が人生

をかけている酒造りができなくなるのは悲しいものだった。

「ならば、我に嫁げばいい」

「あら、でもあなたが大人になった時に私は醜女になっているわよ。
それに直ぐに気が

変わるわ」

「我は約束は破らない。大丈夫だ、これを食べろ」

どう見ても自分より10も下の童子に口説かれるのは笑えてしま
ったが、童子が差し

出した見たこともない綺麗なものに目がいった。

「これは？」

「アンプロシア」

金色に輝くそれは見るだけで女を魅了した。頭の片隅で警報が鳴るがそれを食べたい

という欲望には勝てなかった。

それを口に含むと一気に身体が熱くなり、蹲った。

身体が熱い、まるで業火に焼かれているようだ。女は自分の死を確信した。霞みゆく

景色の中、童子の慈愛の笑みを最後に女の意識は途切れた。

「そして目が覚めたらここにいたの」

女は肩を竦めて深い溜息を出す。

「じゃあ、あなたは不死になったのですか？」

「さあ、分からないわ。ただ私が知っているのは酒の造り方とこの家。そしてたまに来

る見目麗しい方々だけなの。だから、どれくらい時間が経ったのか分からないし、もう

自分の運命だと諦めているの」

きつと多くのことがあったのだろう、男には分からないが女の苦悩が見えた。

ある日、突然知らない子供に連れさられ、知らない場所にただ一人、ここで酒を造り

続けているのだ。

「悲しくないですか？」

「もう悲しいという感情すら消えて、むしろ愛おしいと思っているの」

「愛おしいですか？」

「ええ、いつまでも悲しんでいたら前に進めないわ。だからこれは私に与えられた使命

って思うことにしたの」

ここに來れたのは、あの方のおかげ。それにあの方はふらふらと彷徨っているけれど、

いつも自分のところに戻ってきて酒を飲んで行ってくれる。

それだけで充分だと女は言った。

「そうですか」

「それに、よく×××様や×××様も来て下さって私のお酒を片手に話相手になってくださる

わ

「それは良い酒仲間ですね」

「ええ・・あら、そろそろ一刻が経つんではなくて？嫌ね、ここにいると時間の感覚が

分らないわ」

「そうかもしれません」

その言葉を待っていたかのように先程と同じように家の影から美丈夫が出てきた。

「おや、話は終わったのかい？」

「ええ、ではお願いしますね」

女は男の手を握って駿河のことを言う。

「必ず、届けます」

その言葉に女は華のように顔を綻ばせて笑った。

男はその顔に見惚れてしまったが射殺するような視線を背中に浴びる。ばつと振りかえ

ると美丈夫が口元に扇を当てて男を睨んでいる。

「では行くぞ」

身を翻した美丈夫の後を見て、男は女に手を振って直ぐに走り出す。

また辺りが霧で覆われ、あの古びた家が見えなくなった時にふと目の前の美丈夫が

止まった。

「・・・出せ」

「・・・？」

「先程、渡されたものを出せ」

何の話か分からずに首を傾げると美丈夫は男の手から女に渡された桃色の貝殻を奪

った。

「あっ・・・」

「これは我が届ける」

「待つて下さい。それは私が彼女から頼まれた・・・」

「黙れ」

男が言い終わらない内に持っていた扇を振ると、足元が急に無くなった。

いきなりのことで重心が後ろへといき、そしてそのまま落下していった。

朝日を浴びて、いつものように目が覚める。

「・・・夢？ああ、そうか疲れていたんだな。全く、この歳になって夢を見るとは」

それにしても、ずいぶんリアルな夢だった。

美しい女にも男にも出会えた。そこで何か女と約束をした気がする。しかし思い出る。

することができない。

男はいつものように草臥れたスーツを着て安い家賃のボロアパートを出る。

舗装された道路の横には朝日を浴びて輝く海がある。視界いっぱい広がる海には

水平線付近に何艘かの船が見える。

浜辺を見下ろすと、朝早くだというのに小さな子供が海を見ながら佇んでいるのが

見えた。そして、その男の子は何かきらりと光る石のようなものを投げた。

その石は2回ほど弾んで海の中へと沈んでいった。

小さな時に自分も水面に石が何回跳ねるかやったものだ。少し、心が弾んだ。しか

し自分にはもうそんな時間は無い。早くしないと電車が来てしまう。

男は視線を戻して時計を見ながら歩みを速めた。

周りには誰もいない浜辺に立ちながら、海を見て子供は呟く。

「ふん、ここがあやつの育った場所か」

悪くないと言って、子供は持っていた桃色の貝殻を海に投げると朝日に溶け込むよ

うに姿を消した。

「さて、帰ってあやつの酒でも飲むか」

海に沈んだ貝殻は波にさらわれて、浜辺に近づいては遠ざかり、遠ざかつては近づ

いて、そうしてだんだんと海面の下へと沈み、誰にも見えなくなつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1645t/>

酔神仙

2011年5月23日10時34分発行